

詩編 第19編 1節

「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」

地上で王なる者がこの歌を唄う。王自身が自国民に称えられ、自軍から称えられる存在である。この王が天を仰ぎ、大空に目を移し歌うのである。国の頂点であり、支配者である王が天を仰ぎ、大空に目を移す。自分より偉大なるお方がおられることを歌うのである。王座で高ぶらず、謙る。そのとき生まれる讃えの歌である。讃えるべき光景が見えるのである。見るばかりではなく、語られていることを悟るのである。歌うときには王が王としてではなく、神に愛されているひとりの子として見上げる天であり、大空となる。

王が幼子のようになり驚く。天に驚き、大空大の御手に驚く。驚きの歌となる。普段何気なく見ているものが驚きの源となる。そのところを持つ者は幸いである。驚きの背後におられる聖なる神を仰ぐところの目を持つ幸いである。驚きの背後から聞こえる声無き語りを聞く耳を持つ幸いである。ところの目、ところの耳を持つとはいうものの、実はその目と耳を与えてくださったのが聖なる神である。驚きのうえに、さらなる驚きの事実である。一国の王が天を仰ぎ、その栄光につつまれ、大空を見上げ、そこに広がる御手の偉大さに驚くのは当然である。その一切をご支配される聖なる神を仰ぐ者には。

2023年7月21日